

Human

紅いもと歩む道 現場と研究のあいだで

事業化推進室 農業技術コミュニケーター
城間 一朗（しろま いちろう）



畑から学ぶ

私は沖縄県の中にある読谷村という農村の出身で、これまで沖縄の農業に関わる仕事に携わってきました。最初は読谷村役場の農業推進課でサツマイモを担当し、普及員や研究員の方々と連携しながら、栽培や営農に関する支援を行っていました。実際に畑に出向き、生産者の方々と一緒に作業をする中で、サツマイモをはじめとするさまざまな作物について、現場を通じて農業の基本を学びました。一時期は自ら畑を借り、トラクターやアタッチメント一式を揃えて農業に取り組んだこともあります。

紅いもの買い付け

その後、紅いもタルトで知られる「株式会社御菓子御殿」に転職し、紅いもタルトの原料となる紅いもの買い付けを担当しました。沖縄県全域からの紅いもの調達を担い、一次加工部署の責任者としても業務にあたりました。役場時代と大きく異なっていたのは、生産物を“直接買い取る”という責任の重さです。お世話になった生産者の方々に貢献できる喜びがある一方で、自分の判断が現場に与える影響の大きさを痛感し、常に緊張感を持って向き合っていました。

中でも最も印象に残っているのが、サツマイモ基腐病の発生です。これまで経験したことのない深刻な事態に直面し、生産者・加工業者ともに大きな被害を受けました。その際には、農研機構の皆さまに苗消毒や薬剤散布といった基本的な防除技術の

指導、さらには抵抗性品種の導入支援など、多方面からご協力いただきました。

経験を力に

この経験を通して、現場に寄り添いながら課題解決に取り組む研究の力が、どれほど重要かを改めて実感しました。こうした思いから、現在は九冲研糸満駐在として、農業技術コミュニケーターの立場から沖縄向け紅いも品種の普及に取り組んでいます。

生産者の皆さまと信頼関係を築きながら、地域に適した品種の導入や安定生産の支援に尽力しています。現場の声を研究へつなぎ、研究成果を現場へ届ける“橋渡し役”として、沖縄の紅いも産地の発展に貢献したいと考えています。



▲宮古島のサツマイモ生産者の方々と（著者は右から2番目）